

梅の花かほるも風の吹廻し

「一七八九年は？」

「フランス革命」

「ピンポーン」

受験世界史の超基礎問題だが、では、日本の年号ならいつで、何があったか。

日本史選択の学生なら、寛政元年、松平定信の寛政改革くらいはすぐ答えられるはずだが、五年目、十年目の社会人はどうか。

不況残業に追われる会社人間に限らず、社会のご意見番を自任するインテリ・評論家ですら、「自由・平等・博愛」には一言あっても、白河の楽翁など知らなくとも恥でないといった雰囲気がある。

---

「よしの冊子」

中央公論社『随筆百花苑』八・九巻

かたや世界史的「大革命」、かたやローカルな「改革」という言い分もあるだろう。が、どこかいびつである。そう言ったからとて、葵の印籠よろしく、「超国家主義者の論理と心理」などを振りかざされても、挨拶に弱る。

こうなったには、歴史業界の体質もある。たとえば、「国家権力の本質は、生産関係の本質」採取形態の本質＝階級関係の本質によって規定」され、江戸の本質は「絶対主義」で、明治のそれは、「暴力的に原蓄を完成させた専制的軍事的帝国主義」云々。

気恥ずかしくも堂々の文体だが、大昔に世間を風靡した懐かしの歌ではない。最近ご活躍の中堅江戸研究者の一文である。部外者にはうかがいしれない業界事情もあるのだろうが、これではお堅い研究書を敬遠し、歴史離れを起こす読者を非難しにくい。司馬遼太郎さんを惜しむ読者が絶えないわけでもある。

むろん、こんな生硬調べばかりではないが、どうすれば生きた江戸を学べるか、門外素人は苦心する。当時書かれた史料に自分で当たるのが確かだが、やってみれば分かるとおり、史料を楽しむにも土地勘が必要で、それには専門史家の手引きがいる。ところがその専門家の史眼が……と堂々めぐりの苦境である。

一案が、江戸時代のサラリーマン、御家中の日記である。組織に生きる宮仕えの世界なら、われら凡人にも思い当たる節はある。かつて『元禄御畳奉行の日記』（中公新書）が爆発的に売れたのも理屈は同じで、楽しく読めるのは請け合ってよい。

ただ、口当たりや消化能力を考え、十分に調理されたつきだしに似たところはある。歯ごたえ、腹もちを考えると多少もの足りない。幸い、元の日記、『鸚鵡籠中記』が岩波文庫で手に入るが、尾張藩用度課長さんでは、やや軽量級かもしれない……。

そんな向きには、多少グルメ趣味にはなるが、『よしの冊子』が、シェフ本日のお薦めである。

寛政改革をしゃにむに進める幕府の最高実力者、老中松平定信のもとに寄せられた官界や世間の裏情報集である。隠密やらお目付配下の徒目付やらが、そこそこに出没し、幕閣の噂、役人評判、人事異動の予測、贅沢や賭博の禁令に揺れる世間の声など、改革政治がまき起こした波紋を調べ出しては、逐一ご注進に及んだ。

姦通騒ぎから、もったいをつけて売り込みに走る「久しい馬鹿」の学者まで、話題には事欠かない。たとえば江戸後期には下火になるという男色。改革肅正のご時世でも、ニューハーフに狂う武士はいて、「御番人美少年杯出候へバ、仲間共大に男色はやり候由」とか。

田沼以来の賄賂横行のはなしも多いが、なかには実直ゆえの幕臣悲喜劇もある。妻子にブーブー言われながらも、蔵宿の負債をせつせと返済していたところ、借金棒引きのお触れが出て、女房と喧嘩したとか、和歌を嗜んでいたのに、身元調査に来た隠密が誤って長唄好きと報告し、出世を棒に振ったとか……。

人柄・能力とも抜群で、京都町奉行に抜擢された目付の菅沼は、家よりお城にいるのが好きな仕事人間だが、実は奥方が怖いので、今度も女房は江戸を離れるのに反対とか。帰りたくない症候群

は江戸にもあったらしい。

じつに色とりどりの話で飽きないが、なんといっても神髓は、江戸行革に揺れる官界内幕にある。耳慣れない人名や職名、分かりにくい江戸言葉も出てくるが、そんな個所は読み飛ばしてかまわない（誤写か誤植か知らないが、明らかな誤記も散見されるのだから）。気にせず漫然と字面を追っても、ニヤリとしたり、ウーンとうなったりするくだりがきつと出てくる。

テレビにも顔売った火付盗賊改・長谷川平蔵の評判は概して高いが、「高慢をする事好きにて、何もかもおれがおれが」で困るとか、術策を巡らす姦物で、しかも学問はないといった批判もあった。

当時の役人に教養のないのは世間の常識で、学識のある定信さんが次々にお出しになるお触れや通達のおかげで、「質素儉約齟齬」などの難しい字を見知って喜ぶ無学も多いという。

改革で大蔵省採用試験（勘定奉行所筆算吟味）が厳しくなったにもかかわらず、賄賂で出世が決まった田沼時代の惰性で、読み書き算盤のできないまま応募し、試験当日慌てて病欠する、そんな不心得な幕臣もいたという。

町奉行から勘定奉行へと異例の逆コースをたどった「柳生主膳ハ色男故、宗十郎と名付候由」などは、色男で、政界の団十郎と異名をとった佐藤栄作元首相を連想させる。

ただし、奉行相応に老けて見えたいと、急に「腰をかがめ登城し」たあたりは、昭和とは微妙に違う。定信さんの信頼は抜群だが、世間や下僚の評判が今ひとつぱっとしなかったのは不幸である。

定信の右腕として改革政治を推進した若年寄の本多弾正。学問は定信、経済は本弾と、滑り出し好調だが、ご時世にもかわからず賄賂は取るらしいとか、「随分だまされる人だ」とか言われ、定信との不仲説まで流れた。

最高実力者の定信さん。出だしは世間もベタぼめだったが、登場して二年後の寛政元年夏には、改革不況にあえぐ町方経済界の本音を吐露したので有名な狂歌、「白川の清き流に住みかねて濁りし田沼の水ぞ恋いしき」が登場する。

寛政三年正月には、不景気と博打禁止で行き場をなくした浪人・御家人が、押し込み強盗に変身し、町家も武家も大恐慌。「越中様（定信）も至ての御不徳だ」と、世間に嘆きの声が充満したという。

むろん、まさに「よしの冊子」で、「そのようです」ふうの無責任。口さがない世間の噂の聞き書きで、嘘かまことか保証はない。激務のあいまに、自ら目を通した定信さんもたまりかねて、これは「虚説」これは「実説」と、所々に書き込みを残している。

ただ、現代の永田町や霞が関、あるいは皆様の職場ご同様で、根拠のあるなしによらず、噂の横流しと裏読みは業界遊泳の必須科目である。とくに自他の人事情報は、三度の飯より気になるのが、宮仕えの習いである。

「梅の花かほるも風の吹廻し」。こんな発句も紹介されているが、人事は今も昔も風の吹くまま。定信さんの一途な思いにもかわからず、悪貨が良貨を駆逐し、憎まれっ子世にはばかる巡り合わせ